

29. 骨シンチ剤 ^{99m}Tc -ハイドロオキシ MDP と ^{99m}Tc -MDP の比較小野 慈他...624
 30. 骨シンチグラムの delay time の検討 (MDP と HMDP の比較)古賀 靖他...624
 31. 骨シンチグラフィー時に描出される腎イメージについて
 ——その後の症例についてのまとめ——柳沢 宗利他...625

演 題

1. RIA による血清ケノデオキシコール酸 (CDCA) 測定の検討

前田 貞美 小野寺よう子 佐々木康人
 千田 麗子 染谷 一彦

(聖マリアンナ医大・3内)

胆汁酸ケノデオキシコール酸 CDCA の RIA 測定系を作製し、検討したので報告する。

抗体は、CDCA-BSA 結合物を Freund complete adjuvand と共にウサギ皮下に反復注射してえた。

測定法は、標識物質に ^3H -CDCA, B-F 分離にチャコールを用い、 42°C 1時間インキュベーションし、CDCA 1~400 $\mu\text{g}/\text{dl}$ にて標準曲線を求めた。

基礎的検討：1) 交叉試験、抱合型 CDCA と最高41%だった以外、他の6種の胆汁酸との交叉は4%以下であった。2) 薬剤等による干渉、ステロイドホルモン、ビリルビン、活性 V.B₁ に高かったが、希釈により除外できた。3) 希釈試験、20倍以上の希釈により直線性がえられたため、患者血清を100倍希釈して測定した。4) 回収率、78.8~117%、平均91.1%。5) 二重測定による測定内誤差は6.5~11.8% (C.V.)、平均8.9%、測定間誤差は14.2%であった。

臨床的検討：正常者 $104 \pm 82.8 \mu\text{g}/\text{dl}$ ($n=51$)、より正常値は270以下とした。肝硬変症例を GOT 40単位以下、100未満、100以上の3群に分類、それぞれ $4,438 \pm 3,313$ ($n=13$)、 $4,663 \pm 4,543$ (19)、 $5,610 \pm 4,848$ (5) と差はなかったが、慢性活動性肝炎の $2,051 \pm 2,277$ (12) に比べ高かった。急性肝炎ピーク時 $13,588 \pm 7,214$ (12)、肝障害を認めない胆石症 53.4 ± 30.5 (15) であった。急性肝炎経過中、CDCA はトランサミナーゼにおくれて上昇し、早期に正常化する傾向を認めた。従来の肝機能検査とは、各疾患共関連しなかった。高速液体クロマトグラフィーによる測定値とは $r=0.85$ ($n=108$) とよく関連した ($p<0.01$)。

2. 「SPAC α -feto kit」の基礎的および臨床的検討

高原 淑子 佐々木由三 佐藤 仁政
 石橋 章彦 正木 英一 与那原良夫
 山下 昌次 近藤 誠

(国立東二病院・核医学センター)

SPAC α -feto kit による血中 AFP 値の測定を行い次のような成績が得られた。

インキュベーション時間と温度の変化は、高濃度血清において時間の延長、温度の上昇に伴い低値を示す傾向がみられた。

同一ロットによる再現性の変動係数は、8.19%、2.73%、5.63%、異ロット間の再現性の変動係数は、8.97%、7.97%、2.52%であった。

2種の血清について、1/2、1/4、1/8と希釈した結果、両者ともほぼ一直線上にあった。

2種の血清に標準液を添加回収を行った結果、その平均変動係数は、99.08%、100.9%と良好であった。

SPAC α -feto kit と α -feto “栄研”との相関係数は0.948、その回帰直線式は、 $Y=1.65X-2.23$ で本キットによる測定値の方が高値をとる傾向にあった。

本法による健常者の AFP 値は、 $1.61 \pm 1.31 \text{ ng}/\text{ml}$ だった。また原発性肝細胞癌は、14例で、その範囲は20.4~10,700 ng/ml と高値を示し、急性肝炎では0.6~498.2 ng/ml 、慢性肝炎では0.2~221.5 ng/ml 、肝硬変症では0.9~324.1 ng/ml 、転移性肝癌では1.9~95.8 ng/ml 、妊娠前期では0.23~42.7 ng/ml 、妊娠後期では97.5~400.6 ng/ml であった。

3. SPAC α -フェトリ A の基礎的検討と臨床応用について

大塚 英司 市原 真 足立 信一

(大和市立病院・アイソトープ室)

α -Fetoprotein の測定法は、現在 Radioimmunoassay